



Title	英国国語教育論争管見
Author(s)	田尻, 雅士
Citation	大阪外大英米研究. 1994, 19, p. 215-230
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/99177">https://hdl.handle.net/11094/99177</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 英国国語教育論争管見

田 尻 雅 士

0.

私は、1992年9月より一年間、英国エセックス州コルチェスターにあるエセックス大学（University of Essex）の現代日本研究所（Contemporary Japan Centre）において、日本語教育にたずさわった。私の専門である中世英語・英文学の研究を兼ねての滞在ではあったが、エセックス大学は、こちらの方面の専門家はおらず、図書も十分とは言えなかった。だいいち学期中は不慣れな日本語教育にかなりの時間を割かれる。余暇を利用して中世英文学ゆかりの地をたずねたりはしたものの、本務はあくまで日本語教育であり、それはそれで実に得難い体験であった。

私はその間、英国人の日々の営みや、行事、巷の話題などをなるべく貪欲に観察してやろうと考えた。新聞、雑誌、テレビなどのマスメディアにもこまめに目を通すようにした。それまでの私にとって、英国とはすなわち中世英国であった。チャーターやロマンスの英国であった。しかし今回の滞在中、私の周囲にいた多くの英国人は、チャーターなどほとんど関心もないか、いや、ことによったら名前すらも聞いたことがない、といった人々だった。考えてみれば当たり前のことである。この当たり前のことを目の当たりにすることによって、私の英国に対する従来の認識は、多少なりともカウンターパランスされたと思う。

観察といってもあらゆることに関心を払うのは不可能なので、いくつかの事柄に重点を絞って（意識的にそうしていた訳ではないけれど）、日記めいた物をしたためたり、新聞の切りぬきを集めたりしていた。その関心事のひ

とつに、1993年の春ごろから話題になった、義務教育における英語、つまり国語教育の問題があった。（「国語」というのは適切な表現かどうかかわからないが、「英語」といってしまうと第2言語としての英語のようにも取られるので、以下「国語」で通す。）日本語を教えていても根は英語教師、英語、と聞くとある程度センシティブにならざるを得なかったのかもしれない。

もとより初等・中等教育の現場に立った訳でもなく、専門的に研究した訳でもないから、所詮野次馬的関心の域を出ないが、以下に、私が新聞等によって知りえた英国国語教育論争のあらましを報告したい。この論文集は私の恩師である金山 崇教授の退官記念のものであり、本来なら私の専門分野に関わる本格的論文を投稿しなければならない筈である。過去一年間にその方面での研究の蓄積がないので、このような報告でお茶を濁さねばならないのは残念なことだ。しかし、研究者として多少、方向性がつきはじめた時期に、ふってわいたように実現した今回の英国滞在で私なりに考えたことは、きっと今後の私の仕事に反映されるであろう。その意味で、こんなことでもまとめておくことは、多少の意味があると思う。

1.

ものの順番として、英国の初等、中等教育の現状を簡単に触れておきたい。以下は、主として Michael Baker, *A Parent's Guide to the New Curriculum* (London: BBC Books, 1992) を参考にした。

この国の教育システムは、周知の通り、日本よりは多様性に富んでいると言える。日本人にとってはなかなか理解しにくいところである。詳しいことはいろいろな文献にも紹介されているので略すが、要は5才から16才までが義務教育で、その間、複数のトラックから自分（の子供）にあったものを選べばよいことになっている。さらに教育を受けたい者は、絶対数こそ日本より少ないが、いくつかの選択肢から各自にあった高等教育機関を選ぶのである。ただ、高等教育を受ける者の割合は、日本のそれよりはずっと低いようである。

サッチャー政権は1988年に The Education Reform Act を導入し、これに則って The National Curriculum を制定した。子供たちに、幅広く、バランスの取れた教育を、全国一律に保証するのが目的である。これにより、公立校で義務教育を受けるイングランドとウェールズの生徒は、学校のタイプに関わらず、定められた科目を義務的に学ぶことになった。その科目には「中核科目」と「基礎科目」があって、前者は数学、国語、科学、ウェールズ語（ウェールズ語を常時使用するウェールズの学校のみ）、後者は歴史、地理、技術科、音楽、美術、体育、現代外国語（中等教育のみ）、ウェールズ語（ウェールズ語を常時使用しないウェールズの学校のみ）となっている。スコットランド、北アイルランドにはそれぞれちょっと違ったシステムがあるようだが、本報告では取り上げない。

私は、皆がナショナル・カリキュラムが云々……と言っているのを聞いて、最初はナショナル・カリキュラムが改定されたのだ、と思い込んでいた。しかしそうではなくて、史上初めてナショナル・カリキュラムができたのであった。それも猶予期間が設けられていて、完全実施されるのは1996年になるそうだ。大学ならいざしらず、義務教育ではそんなものあって当たり前と考えていた私は、彼我の差を思い知らされたことであった。

このカリキュラムでの国語教育の特徴を拾ってみると、従来以上に「聞くこと」・「話すこと」に重点が置かれている、「書くこと」ではスペリングの正確な習得が奨励されている、11才以上になると、聖書、ワーズワース、ディケンズ、シェークスピアなどの古典学習が強化される、などの点があげられる。

試験制度について言えば、生徒たちは7才、11才、14才、16才で試験を受けることになっている。これはそれぞれKey Stages 1、2、3、4と称される教育段階での習得度を見るためのものである。なお、16才での試験は1986年に導入されたGCSE（General Certificate of Secondary Education）と呼ばれる試験がこれに当てられ、義務教育の総仕上げとでもいうべきものである。GCSE では、綴りや文法の間違いが、国語だけでなく他の科目で

も減点の対象になる。

2.

上に挙げた本の著者、ベーカー氏はこの新しい制度は定着しそうである、と楽観的であるが、どうもそうとばかりも言えないようだ。ことの発端は1993年4月15日にジョン・パッテン教育大臣（John Patten MP, Secretary of State for Education）がナショナル・カリキュラムの枠組みの中で、国語教育を重点的に改善する、と発表したことであった。ナショナル・カリキュラム・カウンシルの答申という形ではあるが、その後の展開からみても、パッテン教育相が旗振り役であったのはまちがいない。その改善内容とは、①明瞭な言葉使いと正しい文法を重視する“Standard English”を教える、②各年次で、年齢に見合った名著を読ませるよう指導する、などが骨子である。②については、推奨される作家のリストも発表された。膨大な数の作家名が挙げられている。ちなみにシェークスピアはKey Stage 3、つまり11歳から14歳で読むように勧められている。喜劇では『真夏の夜の夢』、『十二夜』、『お気に召すまま』、悲劇では『マクベス』、『ロミオとジュリエット』、『ハムレット』、史劇では『ジュリアス・シーザー』、『ヘンリー四世』、『リチャード三世』が挙がっており、この中からカテゴリーを違えて最低2作品は読め、とある。Key Stage 4 になるとチャーサーもリストに混じっている。ただし中世の作家は彼一人である。手前味噌な作家だけ挙げたが、もちろん名前も聞いたことのないような現代作家、そして低学年向けには児童文学者らしい名前も見受けられる。

これにまず噛みついたのはいくつかの教職員組合を中心とする国語教師たちだった。文法重視策については“an obsession with standard English”という声が聞かれたし、作家リストの件では労働党のスークスマンが  
“It is not the job of the Secretary of State to prescribe a reading list for our schoolchildren” と抗議した。さらには「子供がスタンダード・イングリッシュなんか話しだしたら、親が『この子どうしたんだろう』って心

配するじゃないか」と言う国語教師もいた。(以上、1993年4月16日付、*The Guardian*より。)

この改革案は大学の研究者の間でも概ね不評だったようだ。*The Times Higher Education Supplement* の6月11日版には、オックスフォード大学のテリー・イーグルトン (Terry Eagleton) を起草者として576人もの大学の国文科 (英文科) 教員の署名入りの公開書簡が掲載された。もっとも、この書簡はもともと1992年11月に21名の署名で公開されたもののようで、その後の成り行きもあってか署名者が爆発的に増え、再度掲載の運びとなったらしい。イーグルトンが起草者となっているが、署名をした研究者の政治的立場は必ずしも左ばかりではない。またオックスブリッジの学者も42名が署名している。エセックス大学の文学部の先生も2人混じっていたし、中世英文学者とおぼしき人も少なくとも7人いた。その文面はかなり過激なもので、

“the Government’s doctrinaire preoccupation with these skills [grammar and spelling] betrays a disastrously reductive, mechanistic understanding of English studies” などとこきおろしている。さらに、方言や労働者階級の言葉使いへの敵視は偏見そのものであり、子供たちに悪影響を及ぼす、という意味のことも述べている。シェークスピアの早期導入については、シェークスピアの重要性は認めながらも、14歳の子供に読ませるのは古典嫌いを増やすだけ、と断じている。いわんや “a dictatorially imposed canon of supposedly great works” などは論外である。*THES* も少々悪のりして “Children will become canon-fodder” なんて見出しを付けている。

教育界からの反発は紙上で政府批判にとどまらず、とうとう実力行使に及んだ。6月7日から始まった14歳の生徒向けの試験のうち、少なくとも国語の試験は教師、生徒ともほとんどボイコットしてしまったのである。本来なら4,400校で600,000人の生徒が受験するはずだったのに、試験が実施されたのはごく僅かの学校に過ぎなかったという。6月8日の *The Guardian* 2 に初日の国語の試験問題のうち、標準レベルのもの (同じ14歳

用の問題でも、生徒の学力に応じて複数の問題から選べるようになっている）が掲載されたので見てみよう。第一部は読解問題で、一つはある種の紀行文、もう一つはフライト・アテンダントの心得みたいなことが書いてあり、それぞれ文章を読んで問に答えよ、というやつである。第二部は国語の運用能力を見るもので、今度はどういう訳か空港職員の仕事を描写した文章と、大西洋をヨットで渡った女性のインタビューが題材となっている。両方とも穴埋め問題だが、前者は適切な言葉を入れるマルチョイ式問題、後者はインタビューを記事としてリライトさせる問題で、直接話法を間接話法に換えるテクニックなどが必要である。第三部はdirected writingで、スコットランド・ナショナル・トラスト（名勝史跡保存団体）に手紙を書くという設定で、いくつかの条件を満たした資料請求の文章にしなければならない。

私は最近の日本の中等教育の国語科の実態を知らないから、大きなことは言えないが、もし上記の問題に見合ったようなものが、日本の中学校で出題されたらどうであろうか。第一部と第二部の出題は、特に大きな話題にはならないだろうが、かなり文学色を排したジャーナリスティックな、あるいは身辺雑事的文章であるとの指摘が出るであろう。（もっとも、文学の試験は一括して翌日の試験にまわされたのであるが。）第三部は、少なくとも私などが受けた国語教育では教えられなかったことである。「手紙の書き方」みたいな授業はあったかもしれないが、こういう公的機関に出すような実用的なものではなかったし、そもそも全県的、全国的規模の試験にそれが出題されることは考えられなかったと思う。日本のマスコミならば、「ユニークな試み」などと評価するかもしれない。しかし、この試験の英国各方面の評判はいたってかんばしくなかった。試験問題を掲載した*The Guardian* 2 は、幾人かの識者のコメントを紹介しているが、ロンドン大学教授でフェミニズムの旗手、リーザ・ジャーディン（Lisa Jardine）は“the passages of writing are at best grey and at worst bureaucratic office-speak”と断じ、“it made me weep to think that this was a nationwide test in our, on the whole, rather beautiful and elegant language”と慨嘆して

いる。児童文学者のレイチェル・アンダーソン (Rachel Anderson) は、出題された文章について、“the kind of language being encouraged and comprehension being sought has a strong commercial bias” と批判している。「商業主義偏向」という断罪のしかたが印象的である。もっと手厳しかったのはある生徒の意見で、こんなものでは生徒の創造性は伸びないと言う。この男子生徒は、短い文章の中に数回、創造性（の欠如）という言葉を使っている。

文学の試験は日を改めて実施された。全部を見る機会にはなかったが、6月10日付の *The Times* が、そのうちシェークスピアからの出題を掲載した。『ジュリアス・シーザー』からの出題である。詳しい紹介は略すが、登場人物の心理状態を問うなど、まあオーソドックスな国語の問題のように思えた。この日の *The Times* に掲載された識者のコメントは、しかし、かなり辛口である。ロイヤル・シェークスピア・カンパニーのある演出家は、「こんな無味乾燥な問題を出された日には、子供たちは生涯シェークスピアから遠ざかってしまう」と述べている。極端とも思えるのだが、進歩的と言われる *The Guardian* も、保守よりの *The Times* も、教育相の反論は別にすると好意的な意見は一切載せていなかったようだ。そんなコメントをする人がいなかったのか、あるいは新聞社としての一つの意見表明か。もっとも、*The Daily Telegraph* あたりはどうだったか、入手しなかったのでわからない。

以上が、93年英国国語教育論争、と私が勝手に呼んでいる一件のあらましである。94年には、今回の政府方針に則った、初めての GCSE の国語の試験が実施されるので、さらなる混乱も懸念される。それにしても、学校の試験一つで教育大臣その人がここまで矢面に立たされるというのは、折からの保守党政権の不人気という背景を考慮に入れても、私には驚きであった。これは、新聞などに “John Patten’s English test paper” などという表現が出てくるのでもわかる。パッテン氏も黙っていた訳ではなく、テレビにも登場してさかんに自説を擁護していた。周囲の英国人に聞いても、「あの人は一昔前の政治家、という感じ」と甚だ不人望な大臣だったが、ここまで頑張



るとむしろ清々しさすら感じてしまう。今回の一件の後、夏であったか、教育界で四面楚歌となったパッテン教育相はとうとう入院してしまった。本人は、今度のことと自分の健康状態は無関係と言っていたが。日本なら、文部大臣が、例えば、国語審議会の答申や「大学入試センター試験」の内容で非難されることはまずないだろう。政治的判断がともなう教科書検定などは別にすると、大臣がそういうことについて直接指導したり、正面切って意見を述べるのが稀だからである。今回の英国での論争は、英国知識人の国語（教育）への関心、大臣の責任の重み、など彼我の差を感じさせられたできごとであった。

3.

ここにおもしろい新聞記事がある。例の試験の直後の6月13日の日曜紙 *The Observer* の Review は、昨年 GCSE を受験した16歳の少年に、1932年のOレベルと呼ばれる、GCSEの前身のような試験のうち国語の問題を受験させ、81歳のおじいさんに今回のやはり国語の試験を受けさせて、プロの試験官に採点してもらい、その試験官および本人たちのコメントを紹介する、という企画を行った。他にも6人の「受験者」が自分たちの母親や息子が受けたような問題に挑戦している。テレビでおなじみの有名人も混じっている。

少年が受験した1932年のテストには、「以下の文章を、文と節に分析し、イタリックの語句の文法的機能を説明せよ」という問題があって、少々複雑で、あまり面白くもない文章が掲げられている。彼がこの試験に目を通した瞬間の感想というのが、“Oh God, what have I let myself in for?” というのであった。自分が今まで受けた試験とあまりに違っていただけである。「今の試験のほうがいいよ、文法事項の暗記なんかいらないし」というのが彼の結論であった。それでも彼はエッセイなどで点を稼ぎ、B+／A-を取っていた。おじいさんの方は、最近の試験について「特に難しくはなかった。あまりいい文章を出題してないね。文法問題が少ないようだが、これは他の設問への答案から判断できるから、まあよかろう」などと述べている。もっ

とも採点した試験官は「自身過剰。試験官を試験しようとしているのでは」と不快感をあらわにし、能力を認めながらも10段階中7の評価を与えている。その他の人は設問を取り違えていたり、はじめから落着きで取り組んでいる人もいて、この試みがなんらかの国語教育学の意味を持つかどうかは怪しいが、ともあれ過去60年間の、この国の国語教育の変遷をざっと把握するための一資料としては好企画だった。

英国の中等教育レベルの国語教育は、過去数十年、文法—正確には文法についての知識—を重視する教育を排し、授業運営を各教室に任せ、生徒の創造性を重んじる方向へと進んできたようだ。エセックス大学で親しくしてもらった、私と同年配のある社会人類学者は、日本の教育界の事情にも通じた人であったが、「英国の国語教育では、例えばある文学作品に対する教師の見解が与えられたとすると、それに対する生徒の批判などがあって、意見の多様化という方向に動く。日本の教室では、教師が意見を一つに収斂していかこうとするのではないか」と言っていた。そんな状況にあって、1988年以来の英国政府の一連の方針は、過去へのある程度の回帰であったと言える。今一度まとめるならば、①正しい言葉遣いと文法重視—スタンダード・イングリッシュの導入、②古典重視、③これは声高に唱えられることはないけれど、実用的（商業的）運用能力の強化、④国語科に限ったことではないが、教育の全国均一化、ということになろう。③については、先程の14歳生徒用試験の初日分に現れていたように思われる。これらの項目のうち、一つ、二つならともかく、一斉にやってしまうというのだから、個人主義的傾向の強い英国知識人の反発は必至だったとも言える。

今般の教育改革は、ぱっとしない英国経済、EC統合といった状況下で、なんとか教育面での競争力を高めようとする英国政府の努力の一環である。かれらが念頭においていたモデル国はドイツなどのヨーロッパ大陸の国々が主であったかもしれないが、日本もその一つであったのではないかな。創造性ということを教育の至上の目的とするならば、従来の日本の教育は諸悪の根源のように考えられがちであるし、事実そうかもしれないが、それを真似し

ようとしている（らしい）人たちもいることはちょっと心に留めておいてもいいだろう。私は、滞英中、シェフィールド大学の中世英文学者で、現代英語の文法書なども著しておられるノーマン・F・ブレイク教授（Norman Francis Blake）とお話する機会があったので、この点について聞いてみた。「日本の教育が一つのモデルというのは、それはそうかもしれない。私としては、文法というか文章作法のようなものはしっかり教える必要があると思うが、シェークスピアを教えるか教えないかは、まあ趣味の問題だ。いずれにしても、教育のことは教師の裁量に任せてもらうのが望ましい。」そんな答であった。

4.

今回の騒動とは直接関係のないことであるが、私の専門である中世英文学が英国の中等教育でどのように取り扱われているか、少々興味があったので調べてみた。従来、義務教育レベルで中世のものが扱われることはあまりなかったようだ。従って、GCSEレベルの学習参考書にも登場しない。義務教育の後、高等教育までの2年間の課程、例えば Sixth Form College などでは、チャーサーが教えられることが多いようである。他の中世作品はあまり見られない。生徒たちがよく使う注釈書に、Brodie's Notes, York Notes などがあるが、例えば後者に収録されている作品は、『カンタベリ物語』では「序歌」、「騎士の話」、「粉屋の話」、「バースの女房の話」、「学僧の話」、「貿易商人の話」、「郷土の話」、「免償符売りの話」、「尼僧院侍僧の話」であり、他に『トロイラスとクリセイデ』もある。「序歌」や「免償符売りの話」などが特に人気があるようだ。他の中世作品で、古英語詩の『ベオウルフ』もヨーク・ノーツに入っていて、原語への注釈もあるが、果してどの程度、使われているのだろうか。

この課程は、教育改革以後もナショナル・カリキュラムの影響を受けないから、すべての学校でチャーサーが教えられているわけではない。ケンブリッジ大学卒の35歳ぐらいの男性は、シェークスピアはともかく、チャーサーな

ど一度も学校では習わなかったと言っていた。日本で、『源氏物語』を避けて高校を出ることは難しいだろうし、中学校でも何らかの平安期以前の古典作品を学ぶので、少し驚いた。(もっともナショナル・カリキュラムの推薦図書リストには、14歳から16歳の生徒向としてチャーサーが入っているから、いずれは義務教育レベルでチャーサーが必修となり、GCSEにも出題されることになるのかもしれない。) また二十代半ばのエセックス大学現代日本研究所の院生は、習ったけれども中世の発音は教わらなかった、と言っていた。この女性は私が「序歌」をミドル・イングリッシュで読むと、「ドイツ語みたい」とおもしろがってくれた。これは余興に使えと思った次第である。

さて、この義務教育後課程の終了時に受ける試験にA-level というのがある。大学進学や就職の際の考査に使われるものである。これの受験用の参考書も数種類売られている。Aレベル試験と言っても、日本のセンター試験のような画一的なものではなく、たとえば国語についていえば、34種類もの A-level English syllabuses があり、各受験生は自分に必要なシラバスを選択するようになっている。このうちチャーサーが出題されるのは14のシラバスのみである。これはあくまで文学作品としての出題であって、語学的な分析などはあまり課されない。

ロングマン社が出している、A-level and AS-level revise guides というシリーズの内、国語のそれを見てみると、チャーサーを勉強する際の一般的心得が挙がっている。拾ってみると、「かならず原語で読みなさい。すこし辛抱すればすぐチャーサーの言語に慣れます」、「でも意味が今とは違っている単語や、特殊な語順には注意しなさい」、「ただし言語の勉強があまりに大きなウェイトを占めることのないように」、「また、背景知識の本を読むのは程々にして、あくまでテキストを重視するように」、「詩の音やリズム、その他の詩のテクニクにも注意を払うように」、「その作品の重要なテーマをよく吟味しなさい」、「疲れたら、カンタベリー詣の巡礼たちが今に生きていたらどんな感じの人物か、なんて想像してみては。免償売りは、シティで怪しげな証券を売りつけていたり…とか」などとアドバイスが書かれている。なか

なか私にとっても役立ちそうなことである。例題として「免償符売りの話」と「郷土の話」の一節が出ていて、「免償符売りが使っている ‘bisynesse’ という単語の意味は何か」とか『郷土』のこの一節でドリゲンはどんな性格の持ち主として描かれているか。また、どういう表現でそれがわかるか」といった出題である。これらに対する、生徒の解答例と試験官のコメントが続いている。

GCSEにせよAレベルにせよ、course work という要素が評価の対象になることが多い。コース・ワークといっても、授業の平常点というよりも、いわば自由研究のようなものである。これには「教育程度の高い両親を持つ子は、手伝ってもらえて不公平になる」という批判もあるのだが、生徒の自主性、創造性の向上という肯定的側面もあって、一応定着しているようだ。Aレベルの国語では、spoken English の実態調査などが奨励されている。

私が入手した、*English Language Project Work* というAレベルの生徒向けマニュアルでは、立案、トピックの選び方、データ収集法、音声言語の転写法、分析の仕方、まとめ方、といった項目が並んでいて、最後に模範的ペーパー3点が収録されている。この3点の内、二つは航空管制官の通信に使われる言語、障害児の言語など spoken English の研究である。しかし最後の一つは“Chaucer’s English”というもので、文学のクラスでチョーサーの言語と現代語の違いに興味をもった生徒が、地元の大学図書館から『カンタベリ物語』の写本のファクシミリ版（転写テキスト付）を借りてきて研究した、というものである。筆者はファクシミリと、一般に市販されている原語版、自分で作った現代英語訳を突き合わせることで、正字法、語彙、統語の観点からチョーサーの英語と現代語の相違を調査している。結論はまあ平凡なものであるが、写本のファクシミリを使った、というのが嬉しい。これは当時の spoken English の生資料が当然望めないもので、少しでもチョーサーのオリジナルに近い資料を、という趣旨であろう。これがかりに大阪外大の英語学専攻の学生が書いたものだとしたら、卒論としては、言語の特定部分にもう少し絞りこんだほうがいいが、3、4年生、あるいは修士課程の

レポートとすれば文句なしにA+であろう。

このチョーサーのエッセイは実際に生徒が書いたものを基にしているようだが、さてこれだけできる生徒がどれほどいるだろうか。と言うと語弊があるが、こういう研究をやってみようと思いつく子が極めて少ないと思われるのである。古い言葉への抵抗ということもあるが、それ以前に言葉をこのように分析するという術をほとんど教わっていない生徒にとって、このようなアプローチはちょっと思案の他であろう。岡目八目とは言わぬまでも、このたびの英国国語教育論争を一瞥しての感想である。

## 5.

以上、国語としての英語が、英国の中等教育界でどのような扱いを受けているのか見てきた。このことが私のような日本の英語教師にとって、どのような意味を持つかという、正直言って、それほど重要とはいいがたい。チョーサーの教授法などは、大学のゼミに一部取り入れることは可能だろうが、もっとベーシックなレベルでの英語教育となると話は別で、母語としての英語と、外国語としての英語というのは当然、一律に扱えないからである。むしろ、日本の国語・国文学の先生方に、この英国のカウンターパートの有りようについて御意見を伺いたいところである。

私としては、もとより英国の制度そのものの善し悪しを言うつもりはない。ここではむしろ、牽強附会を恐れずに、中世英語を研究する者としての所感を述べてみたい。英国での中世研究というと、前世紀はともかく、今日では語学的・文献学的研究から文学的・文化史的研究にウェイトが移っているといえる。アメリカならもっとその傾向が強いかもしれない。このような状況は、あちらの中等教育での国語教育がその背景になっていると言えないだろうか。前出の1932年のOレベル試験のような問題が一般的であった時代ならば、教室でイエスペルセン（Otto Jespersen）の文法がもっと幅を利かしていた時代ならば、研究者（を指す人々）も中世英語をフィロロジカルに分析するという作業に、すっと入れたと思う。今だと、ちょっとそういう気

になりにくいし、やれと言われても、あまり教わっていないから途方に暮れてしまうだろう。極端に言えば、アホらしい、と思うかもしれない。政府の復古的政策が奏功すれば、また状況が変わってくる可能性はあるだろうが。（付言するならば、英国では外国語教育でも、文法教育的要素は最小限に抑えられる傾向にあり、むしろ日常会話などサバイバル用語学力が重視されている。日本語教育も例外ではない。しかも国語教育と違って、政府も復古的要素を持ち出す必要がないから、この傾向はさらに強まっていこう。）

ひるがえって日本の中世英語・英文学界はどうかというと、ある程度の多様化はあっても、依然語学的研究が根強いといえる。ここでいう語学的とは、生成文法的アプローチではなく、伝統文法をベースにしたテキストの分析である。語形だとか、語彙の構成だとか、語順だとかの文献学的分析である。おそらくこの方面の研究者の数は、本国を抜いて世界一ではないか。これは日本語と全然違う、いにしえの外国語だから、という根本的な理由があるだろうが、中等教育レベルの英語や、さらには国語の授業でそういう素養を身につけているから出来ることだと思う。最近の中・高では英文法をあまり教えなくなったようだから、これも今後どうなるかはわからないが、現在30歳以上の人には今述べたことが、大体言えるだろう。

日本の場合、「発信型の語学教育を」といった要求が高まっていることだし、英語教育の現状に安閑としてはいけないのかもしれない。しかし私たちがやっているような分野に限るならば、上に述べた状況はむしろプラスに作用していると言える。中世英語の語学的研究で、日本人研究者に対する期待は英米でも高いと思う。（というより、そんな面倒なことは日本人にお任せしておこう、ということかもしれないが。）ネイティブ・スピーカーが見落としていたことを発見することもある。また文学的研究に進むにしても、初期段階での語学的分析は決してむだではない。

エセックス大学現代日本研究所では、隔週の水曜日に学外の講師を招いて、日本研究のセミナーをやっていた。公開セミナーだが、出席者はセンターのスタッフと院生が多かった。ある時、新進気鋭の英国人日本語・日本文学研

研究者が招かれて“Vagueness in the *Genji Monogatari*”というタイトルで話してくれた。一同、『源氏』の醸し出す彩、みたいな文学的な話を期待して聴きにいったのだが、その内容は物語の中の敬語表現の語学的分析であった。表がいくつも出てくる、まあ文献学的な研究であった。たいてい社会科学の方面で現代日本について修士論文を書こうとしている院生たちにはチンプンカンプンであつたろう。一方、日本語を教えている、日本の大学の国文科を出た先生方は、「あんな方法で何がわかるのか」という感想をいだいておられたようである。事実、日本国内でこういうタイプの『源氏』研究はやはり少数派に属するだろうと思う。

もちろん私は違うことを考えていた。外国語として日本語、まして古典の言語を本格的に研究しようとすればこのようなアプローチから入るのが結局、王道なのではないか。（彼が日本におけるような文法教育をあまり経験していないとすれば、それすら大変な作業だっただろうが。）この『源氏』研究は日本語史研究の一環としてやっているのか、それとも物語の文体的、ひいては文学的研究の予備作業としてやっているのか、今はどちらとも決めずにやっているのか、残念ながら聞きそびれてしまったが、いずれにしても、こういう仕事は今後きっと裨益するだろう。

僭越をかえりみず、私は自らの、いわばカウンターパートに心の底から声援を送っていた。

本報告執筆にあたっては、エセックス大学現代日本研究所スタッフの方々とのお話の中で得られた知見が有益であった。特に、岡崎智巳講師（日本語教育）、当時、客員研究員として滞在しておられた明治大学文学部の古屋野素材助教授（教育制度論）には、いろいろお教えいただいた。ただし事実誤認があるとすれば、私の責任である。また、今回の滞英にあたり資金援助をしていただいた大和日英基金、その他いちちお名前は挙げえないが、滞英を可能にいただいた皆様にもこの場を借りて、お礼を申し上げます。



田 尻 雅 士

参考文献

- Baker, Michael. *A Parents' Guide to the New Curriculum*. London: BBC Books, 1992.
- Coxon, Rosemary & Michael Baker. *A-level English Course Companion*. rev. ed. London: BPP Letts Educational, 1991.
- McDonald, Christine. *English Language Project Work*. London: Macmillan, 1992.
- Sillars, Stuart. *A-level and AS-level English*. Harlow, Essex: Longman, 1990.
- Statham, June, et al. *The Education Fact File: A Handbook of Education Information in the UK*. 2nd ed. London: Hodder and Stoughton in association with the Open University, 1991.

その他、新聞等は文中に明示した。